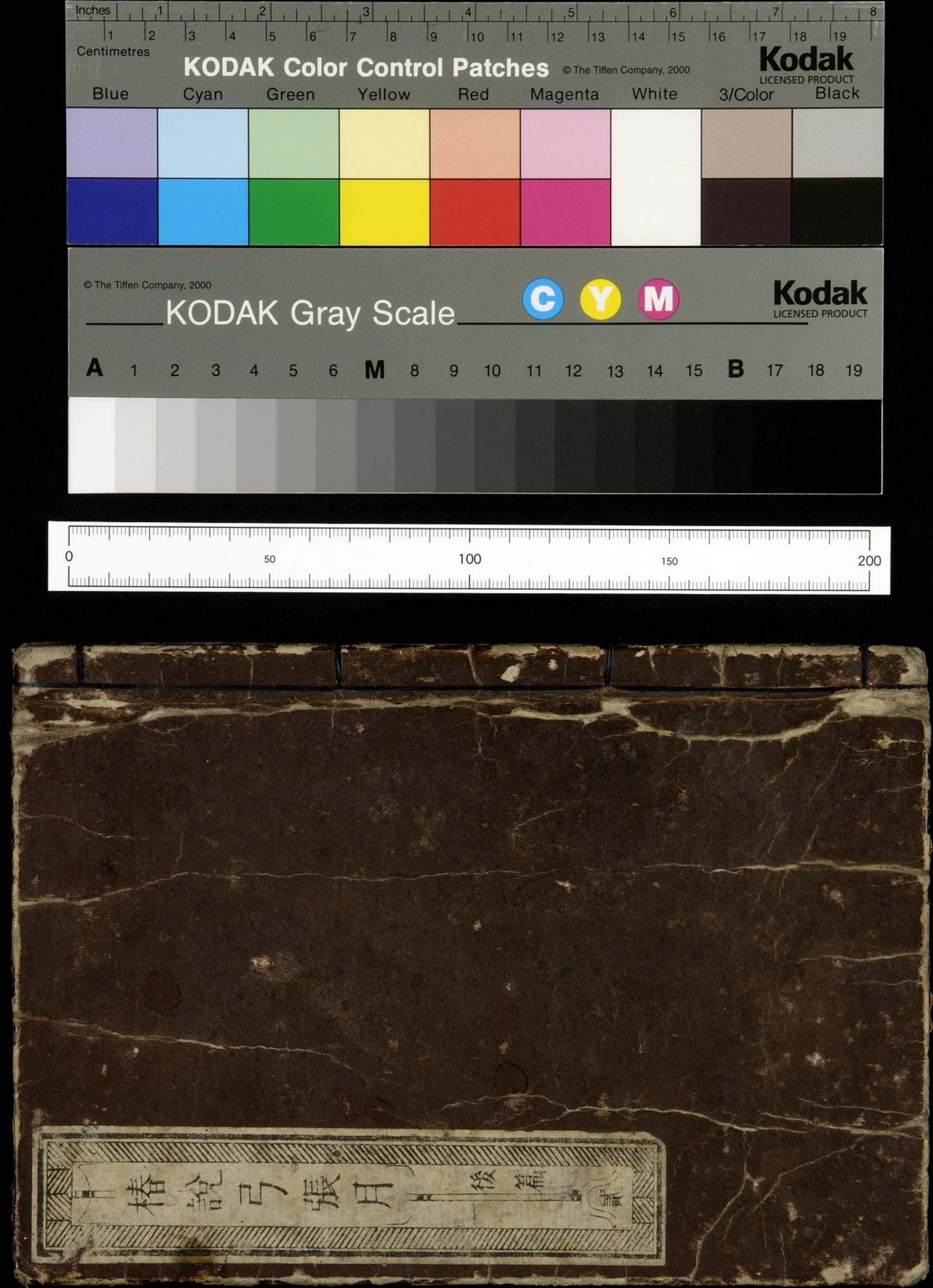

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue
Cyan
Green
Yellow
Red
Magenta
White
3/Color
Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
Kodak
LICENSED PRODUCT
A
M
B
椿説弓張月 後編巻之二

鎮西八郎爲朝外傳　椿說弓張月後篇　卷之二

東都　曲亭主人編次

## 第十八回

海東の磯丹一箭洲民を伏せ
大鬼が嶋みづから三郎英雄を認ㇾ

かくて爲朝主從そ。女護の嶋の舩出一つ南へ投く漕と漕わたり海上二十里ばかりなる所に只半日ふ乘ㇾ來ㇾて。男の嶋へそ着たりける此嶋ハ周五里あまりもあらんとおぼしたる水除の嶮岨なれバ女護の嶋ふも勝れる所爲朝ハものともせで舩子ホ所ㇾ勸しかバ舩子ホ等をㇾ主從陸よりおくれバ前面なる山の半腹を切抜とおぼしき前一方ハ毘竹の網代又鹿柔なんど。を圍ひこまれたる家棟ハ萩萱あまく高三尺ばかりふかまれて。崑崙奴のごとく。眼ハ光りて。太白星のごとく鬼とも人ともつかぬ

ろざされ男ども。むらくと走り出で。爲朝主役ぶ真中おとり繞し。嶋言ぶ
みくしより矢ぱ。昔ようりいく度う流され漂ふる和りてその嶋よ歌ふんともつれども。
巖高くれハ船を入るおぞ。遥ふ吾儕が磯方よ立在ふ矢ハ。恒れまごひて逃
去りめれお。汝ホいうお膽の太くれハ輒くとくハ矢しぞと。問つ顔をさし取て。
半ば呆れてそくみるぞ。爲朝ハ且く女護の嶋よありて。嶋言葉お馴ふひしが。
この嶋人のりのいひざ故も。彼れお異ふぶりくれぱよく其くと矢ぱ笑ふて莞尓
とうち笑こ。めるがりやいくな騒ぎそ。それを清和天皇の後徹六條判官
爲義の八男。源爲朝と呼るくれおれ故めくく伊豆の大嶋お謫つ。去
ぞ。東海の嶋くハ公家より賜つくれ来地なれば。残りなく管領せんめお。
そるくと矢ぱも。汝ホそれを君とし仰ぐ手の貢怠ることおふんお過分
の幸福めぐぞと宣かを。嶋人ホ矢もめくど。そうとやふん爲朝とやふん。

神徹めもつれ。皇子おもおれ配軍となれうふぺそれおごに苅れるもの弦いろ
の時お恩ぱ稟くく君とし仰ぐ何の好めつくく手くお貢さぐた。そもうろ組此
嶋ぱひくたーう。歳ハ千歳おめもり。世ハ三十お及ぶといくども。いまご君臣の
義ぱ締づれ國ぱ」。追奴が面魂のいろ恐めくせぺいうるれ計較を
ふとづうも量がにとくお打作て崖落ふせよことて。異口同音ホ罵矢おぞ。
従者おハ顔うらうえめにぺふいふ蔑ぱんとやひろん肘を
張肩ぱいふにぺ主の後方よおくとれうぱ。倆となく胴震して顔の色ハ海とひとしく。
青ふつりてえそうりけれ。されども爲朝ハさうだるれ氣色なく後者ぱ尻
目おえりて持くたれうと矢ようとするに挟こいうお嶋人水際おたつる巖
石とこおふ立とみるれ汝ホが肢體よ。ぱ比べいづれう堅きと問ふくで。嶋人ホ
大ふ笑くそハ問くほでもぱ吾儕が身體を。血を畏るれ皮嚢食ぱ

盛る器みひとし。縦三十枚の歯。十二枚の肋といふとも。いうで巌よ及ぶ。況や其の言いまぐ果ざれふ。爲朝ハ鏑矢そろ〳〵と弯固め。高さ一丈ふ余つる。覇王樹めてそれ巌の真中ゟ。漂弗と射のくハ。李廣が虎とこそろへ物ゟ。巌ハ中よりにつくを折ま。砕々と碧くとつかれ飛ぐ。忽地水中へ撞と落れハ。鯨の潮を吹ごと〳〵。浪打ゟ入〳〵て陸ゟ浸〳〵。大地も共ふ震動せり。嶌人おハこの形勢ゟてく色をうしなひ。只顧呆れくせんそべゟちぐ〳〵砂のよふ額つてそヤひれハ。吾俤眼めりおぐ〳〵。ゟれハ強弓の壮士ともちぐ〳〵。やう待しまりて。可惜命ゟ喪んといさせしる。悔とどもそのうひ。倘犯せれ罪科を免しのぐ。何よほれ仰おハ特ゟれし。めるおそ弦しれ弓勢やとく。舌ゟ巻く感じめりしぐ。後者おもやみつよくおばえずもく〳〵時と高く法てひらゟれ居これもとうしかぐ〳〵。その時四男五郎と嗚人その友ゟ又かくりて。近曾維いふとふちぐ〳〵。爲朝と呼ると人こて〳〵渡り来つぐ。と風声せ」ゟ外まおなつれぐ。今そこそ人ハ海神のいそもふふてめりそれりめれてよ其弓の太ふるれそれを輙く弯ふ腕のカハ水牛ふも勝るべしかれ勇士ふ因ちることそ聞ひるれめの弓弯てこえぐやといくハ。衆人ゟメく。其詩ハ東の七郎三郎おハ劣りたまぐ。誉




鳥朝
大鬼が嶋ゟ
ゑんを
海岸を
射ル

掌を拍破り。ころび握足し弦を放せば。衆人仰さまふ山崩るかと。象棋さふ倒るとおもふ。鴉朝主従忍ぶ堪ど。吐と笑ふて已ぬ。浩處ぬ雄なの磯よう。羊の齢四十ばかりおとこ。て。顔つれハ落蹈の面めたれど。ろうもめげざれ黒髪の。赤く潮れ。額の上ふ。角のせ生そゝんぐとく。両塊乃痛おりて。胸毛いさゝなりとも。足も熊のやうふとく。身の丈も一丈さく。緒途の鬼よ彷彿これ嶋人海松のごとき。蔵衣な腰ふ纏ひ。藤蔓もて編られ。畚の裏ふ。堅魚四五本と二尺ばかりもあるとんと。そゆる大鰕二ッ入是ると。頭ふ戴たるまを後さまよりみるに。おのれ三郎よなどて遅くと耳ふひゞきしかゝるに。名こそ聞力士ふおとるまじきハこの嶋ふて。今如此のやなんありし。弓ハ弱てんのをと呼かなれを。彼男ハのと苦しておりちて。汝ホ貴人ふ戯るとて。罪をなほ。そ近曽誰いふとは

み〻彼君のる略〻ゑく〻ろ〻ぶる人〻これより生活の便を図ることめ〻と
風声せ〻ばゑれ潜ふ信〻てその人を使〻れを汝〻らあざみ笑ひ〻ら今日ゟ
ゐそひあらゑべ〻それ嚮ふ彼君と衆人の問答をそれを外よ笑まて〻此
魚を漁猟ゐれア〻是よりてふ烹由〻炙も〻く〻饗〻しまつ〻せよとて〻番と四男
五良ふ遍ゟ〻て〻近く〻跪ゐてヤ〻けれハ僕ハ東の七郎三郎と
呼ゐれゐり〻衆人頑愚ふ〻貴人ゟ〻ぞ漫ふ蔑ゟ〻し〻ゟ憎〻しとも
おぼされぞなほ憐ゐ愍を垂のつれハ乃仏のこゝろ〻ぞ元ゟ君のゟまんこゝ
神のそひあふことあり。かれば乃君ハ神ゐりいでゝ敬ひかゝとほざ〻人也〻
生活の便ともおゝべくもあらぬ〻ハ。説諭〻ひねといふげふ孤島の中ゟも人
ゐゐよめ〻ぞ取こそいとおど〻ろく〻ゐれそのいふ処ハ信ありて他〻嶋人ふ勝ゐて
えゆれべ為朝ふく〻放びてこそ汝ハ東の七郎三郎ふく〻ゐりくゐ〻ふ高〻

桃太郎後編之二　六

ゟ縁〻に締ゐ〻汝ゟ女児ゐる長女ふハ二人の子ゟ〻産せゟり。柳為朝嶋〻を編
歴〻去年の春女護の嶋〻推渡りて徐福が故事ゟ〻ゟ〻又その男の嶌人と妹
脊の縁〻ゟ締〻で海神の崇ゐりこゝひく〻傳夫婦をゟふ住むこゝ〻せぶれ
よし審ふゟ〻そ〻その愚直ゟ憐を夫婦ハ人の大倫ゐゐを海神のねこゝろふ
づゐよめ〻ぞ今ゟり男女ひゟゟ住〻て耕作漁猟の役よ〻せんこ〻ゟ〻説示をこと
ゟ〻ども嶋つ女ホゐの頑ゟこゝ〻ゟ〻ゟ〻ゐ美ゟゐれハゐれ長女を相語ゟ〻彼ゟ〻妾と
児ども二人ゟて産せ〻ぶ嶋つ女ゟ〻ゐてその崇ゐるこゝ〻ゟ〻暁得て男女のゟゟも
ふ住果んと新ふをゟく〻れえとその嶋人ふ縁由を説ゟゐし夫婦一つふ聚んと
そふの外他妻ゐ〻それ偏小みこゝ〻女護の嶋ゟ牛を
よりてこゝの嶋つ男三ゟ二をゟゟて彼処へ遣〻又彼処の嶋つ女三ゟ一双
ゟゟてこゝゟ住せんゟ豫〻く妹脊の相語せ〻ゐのふ聾ゟ〻れこゝゐ〻夫婦

ひとつ嶋よ居くゝもぬしその旨兼引やいとゝ問ふ。東の七郎三郎ハさう
ぞう嶋人ホ大きゝ欵びいみくより年ホ一度風の便を得てぞ吾妹子恋と
のこゝろひつゑよ男女ひとつよ娶るそも。海神の祟ホゝはゞれホほと僥倖や
めでたゝ。ぞうくバ君ハこゝろ爲ホ産靈ホゝくほゝ天の河原も千浪とゝりて二つの星もそゝふ
ふうバ紙をめゝ瀬のあるゞ如。るの羽衣引伸と貌よ似るて戀種のこゝ浴も嶋も異ることゑ。爲朝かゝもゝ七郎三郎
よ對ひ。嶋人ホがゝろゞ言況信じて聊も疑さゝれバ自他の幸かり。ゝくゝホ不審をゝ
廿護嶋よおゝくびて。鬼が嶋めりとゞくゝれバ。女護の嶋人ホよこれを聞ホ。男の淫
外よゝえゝ嶋めれるゝ我なゝとゝいゝりゞゝろハめれ。今汝ホゞ形貌をゝれバ醜悪よ
ゝゝ拘ゝゞ。童のさゝはゝそのれをりてゆゝくゝ大児ゞ嶋ゝもよゞゞ。かゝれバおゝゝゝ悪鬼
夜又の謂ゝハめゝゞ。大つゝゝとゝぶゑりゞ又男の嶋よゝ男子のこゝ行ひ分ケて女
護の嶋ホ對ゝて宜ぶ。ゝゝ此嶋の字なりゞゝ又別ホ鬼とゝぶ嶋めりやゝ。そのゝゝこゝ孤嶋
されゞ分別ハゝりゝゞゝとゝゞホ爲朝点頭さゝ。今汝ゞ言ふゝゝ。ゆ大児ゞ嶋の縁
故を發明せり。ゝゝや大つゝゝの意ホもめれゝおゝと嘆んハゞよゝゝゞ又男女ゑゝろ
ホ住むゝゝれゝ男の嶋といゝんも称ゝどこの荒磯の周ホゝ太ゆなゝれ蘆の生ゝれ
バ芦ゞ嶋ゝも名づけよと仰しかバ嶋人欵んゞ。ゞて芦をりて嶋の名とゝ後世
青ゞ嶋とよゞれゝ。この芦ゞゐるなりゝかゆ。さる祀ホ七郎三郎ハ衆人とゝゝのふ爲朝
主従をゝものゞ家ホ誘ゝゝもゝゝ奥内果子ゞ石決明馬刀貝うんどゝ盛ゝゝゞ
て。叮嚀ホりてゝせゞ爲朝つゝゝゝそなうゝて。昔徐福ゞ渡海の私ホゝ七珍万宝

を積〻とてその圀の史ゐも記〻たれがさる器ハ仏くさるうこれハ云下ゐひなむ
うりと宣くハ七郎二郎どもうたいまへとの嶋ゐも五彩龍鬢の帳銀繍
緑邊の氈八尺象牙の床緋綾帖薦の褥馬瑙の皿頗梨の壺陳箪衾
笠打出の巨椀なんど世ゐ愛〻たる賦物ありしとハ仏るのこゐて千餘羊乃
生粉を孑れバ今ハ一ツも持仏くど。又吾倩ハ秦人の後裔とハ仏けど。一文字
ぶゐ識りのも絶くいつぐと回荅ヤセバ烏朝いよ憐こおぼ〻て宣ゐ氏より肩
とゐふ世の常言もさるものぬりうゐは往古の遺風とえゆゐ。山を守て家とすれ
究居のみなりとゐうこちるひつ。その夜ハもゐふ明〻ゐひて次の日。七郎二郎四男
五郎お仏郷導し彼此を打歴ちすゐおおその嶋人の睦〻そゐ。いばれも親族の如
くおそうおくれ魚なども戸毎お配かし。獲そうるハ仏ハその魚を臊子ほし人
数を洩さぐこれを贈れ。その烏体。顋直寡慾ほして方のゐ誠仏ゆりてぜりゝ又その

嶋ゐ。弘法大師の他うれ観世音のそう像いろの比よりうのり裏ゐ弘法のそ彫ありて天長
七年七月七日於江嶋弁財天秘密護摩挙一万座奉修行次其灰此形像仏者也空海と
ゐり。烏朝ふうく信ごてこれ秘蔵せよと仰それバ。嶋人ホ欲ふ命ゐ稟遂ゐこが一
引とうれて。烏朝の仏供一。女護の嶋へ渡りけれそ

## 第十九回

烏朝の武威痘鬼ゐ退く
忠童罪せられて十の指を失ふ

鎮西八郎烏朝ハ。東の七郎二郎四男五郎ホ仏そゞめとして。芦が嶋人殿ゐ将
く。好うびゝ女護の嶋へ帰てゐくのゐ欲び衆皆磯方ふ出迎その
船仏引入ていく。めゝハ親兄弟ゐ會或ゝ夫児を誘うて。おのゝ家ゝふ册
なくく入つ會話のかどくハ書ほうんもくしめゝその時長女ハ父の二郎
ゐ對面〻て迭ゐその恙うゝをよろこび笑えそて嶋人そかゝども烏朝の庇

みよつく男女ありふよりほどふ縁故つゐ匁もひもかけざ彼君ふ給事しく
稚君二人すて産給りしとおがる小二郎八満面ユ笑を含みつれもとさくそのの
ゆゑり。さらばこそ太郎九二郎九をかるくふ抱きめてそえかう
そつ。又長女をえうりて彼此の嶋人ふ曹司の恩澤ゆ蒙ること浅かくざとい
ざも。つゐ親子八他人と同しかくざ。汝て彼を用ひて。稚子ふらゆ養育ほかくせ
よと教訓をさされ間ふ寓朝ハ。この女子ども汝てからて。芦ゐ嶋へ遣し共ふ陰陽
和合の嶋とほざそこのこほしてふ汝の遣が為を弁てしうほしとロ騨
なまくざ。訪ぶるのかぎりなく。みるこ君と仰慕かおざ。寓朝ハやず本意を遂て
今八ゐひ残ととこ明しとおばせつゐ日長女親子よ宜こ告うこれ假初ふての
嶋へ渡りしより。既ユ一年にあまれりされバちうゐよ大嶋へ婿ひ子ども汝ハ
汝親子よ任をれなれバとゐもかくゐも養育てよとゆえるふ長女ハ忽地よ打
ちほれて。君大嶋へ帰りつゐの時ふうゐへ系ほさんず世を憚てゐつこ
おこばちかく及ゐ祝ざ。せめて二人の稚子のうち汝一人八住ひねといふ寓朝
ゆえ。いな汝ホ伴ひといふハ世を憚れのこおこ。正室白縫とゐひし者保元
の兵乱ふ筑紫ふ干て。討死せしとゆえ後ハゆくひ娶れてこと汝ホしと
いくども。大嶋なれ簡江が信くしふ黙止かくて。既ユ二人の子汝産しつ。今又
こうの嶋つ女ホ汝論ん寓ふ汝を側室とおしたれも。ゐ假初の縁なくぞ
や。ゐれを此度汝ホをおて帰ふべ寓朝ハ愛ふ溺ユ色汝好むの人ゐり。何汝
りて嶋人を。教導くとせん。子どもら汝残しおくことゐつ情願ふこそと宜ふふ。
長女八かくと言葉もなく。涙にしてて居さりけれそのほ七郎三郎もし汝そ
曹司の宣ふ処悉く理なり。ゐれ君久しく大嶋ふおいし汝て帰入後
ひ靡くとゐつも。股肱腹心の家隷なふ称ぶ事ホ臨ざハおのれくが走路汝

為朝
うさしまの仰木鳴わたるの
痘鬼を遣る

来むぞ。縦長女と稚君の孫一人ありとも。僕いかで地下までも。四供はうまうるやとこいと信ぎもてカスみぞ。烏朝微笑ゑ。志はされるみなれども。汝が大嶋ふ倶そなへ。長女がいよくなるみうんまげて親子の縁をふそでほりゆくと仰もめぬよ。七郎と二郎勝をすめてぃるそのの妨ぇ。彼が後身女の夫四男五郎へ。ぬざ必信めるのぬ。ねさらば長女へいめれ羊。彼が児の烏ふ山猫を殺して立地みその寛を雪ーかべ。四男五郎夫婦必うく感佩ーて。露ぞかりも疎意ゑー。彼夫婦今この嶋ふめれが稚君のよな後見なり。何ぞも僕ふ打はしもくとほうしつ。俄頃ふ四男五郎夫婦が招たくるその本未審ゑ説ぞよとすれば件の夫婦。一議ふも及ばど領掌ー。四曹司御心安くおぼめされよ。僕夫妻一命ふ掛ても。長女ぞも稚君が守り育まつらせ。この嶋の主と仰ーもべーと誘ーかべ。烏朝も彼ホが信ゆるふ安堵ぞ。必ぐ

推辞ゆるぞ遂ふ七郎ぞ二郎を領くぐぐてお定めのひーぐ。彼が名のゆまりふ因くしてそ。必よかくねべーて。名ぞ鬼夜又と賜りぬ。是はその貌の夜又悪鬼ふ似されはゆべー。僕ぇ。か弗里國の人愚直ぬて忠義ゆり。ぐぐ祇をぐ蛮貊。重價を惜ぢて奴僕とすれぞ。かれば烏朝も。七郎ぞ二郎ぞ面貌醜ぇを嫌ぐぞそのむざ後の。八町礫ゆも劣らぐれをよみて。寵遇殊ぇ篤りて。ふぐ敬ひぞこの日より鬼夜又と名告ーかべ嶋人ホもこれを美ぇ。長女へぐ織の嶋絹を裁縫ぞ。君父の烏ホ餞別をぞ。ぢて両三日順風祇ゆめへー。烏朝へ四人の従人と鬼夜又祇ゆて院ホ纜解ゆ人へ従人ホ名残を惜ぇ只父母ホ別ぐおぐ。衆皆磯方まで送りぬれそ烏朝衆人をえぐりて。これるゆホ紛ぇて忘れられ一條ゆり。この嶋今ぐりへ男女ゆ後ぞもに住なれをゆ。ゆホ女護とぼづんへ義ホ稱ぐぞ仁をぐりて嶋の名ーぇ

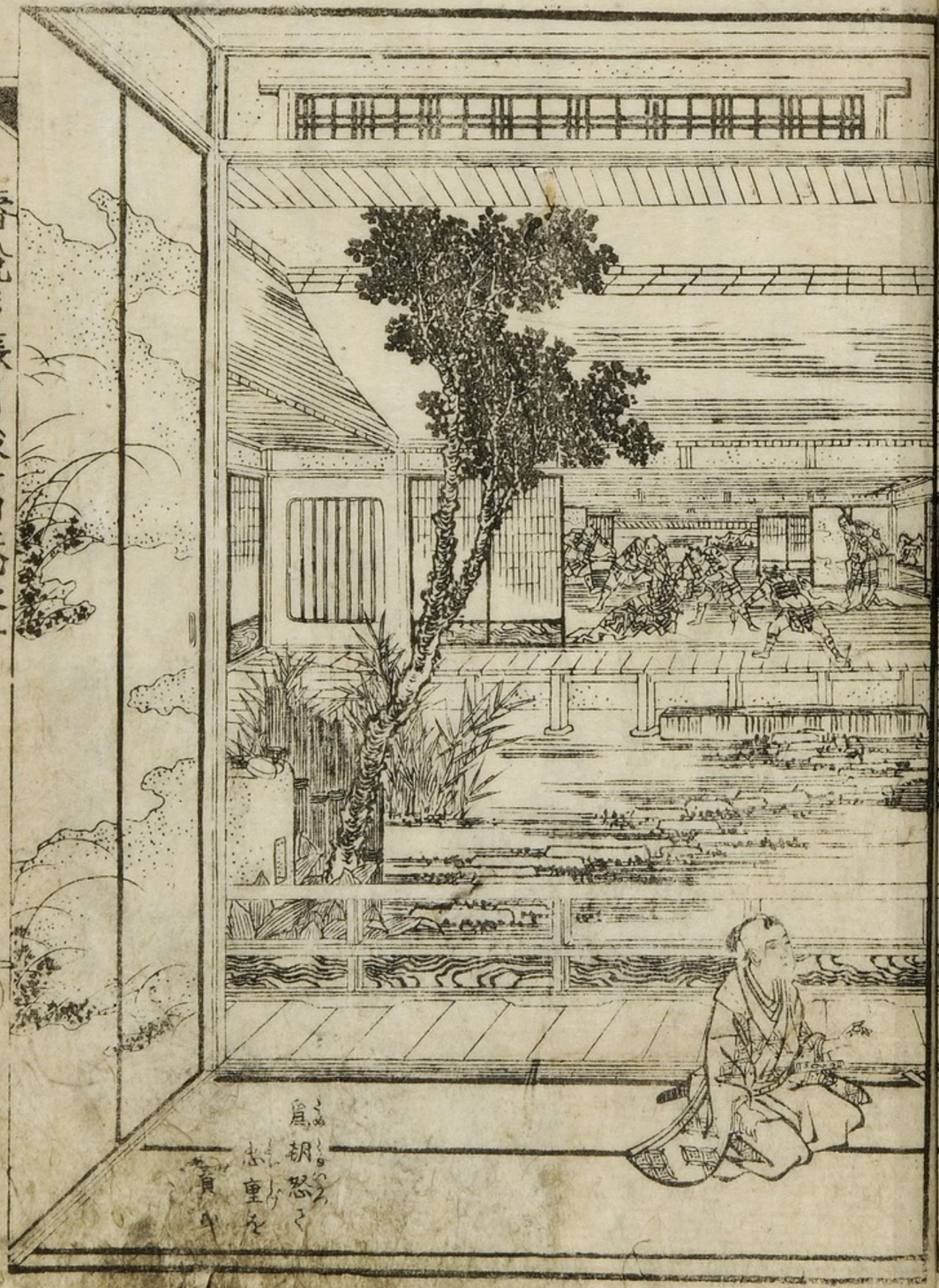
すゞと宣ふ。長女回答ヤ。ふ。ふ。ふ。曹司ハ暮ひなることかく切なれバ是彼と名ハ択んよりかしこけれども殿の名をこの嶋ゐも負をゞ。彩ゐふ栴なる幸ありて。他ー女子ハ父ゐ逐ふ兄弟睦ー〳〵。夫婦の縁ゐも住果れとかひのなきハ我身ゐて兄弟ハ已ゞ父ゐ別ゞ又君ふさ〳〵捨〳〵れて。こゝゐ流磯の嶋の名ハ八郎と呼びなバ君ゐ縁ゐも住果れてこそなけめとこゝろひてよと泣ハ曹司いとゞしく。みな理と應ゞされバゐやさの時より女護といふ名ハ更めて八郎嶋とゐ倣せしゐ物換りゆく世のさだめを訛ゞ。今八丈と稱るこの荒磯とぞゐくされ。さふ又八郎嶋より西の方。海上二里ゞり弐隔てさゝやかなる枝嶋ありけり。長女ハあまりに別を惜ゞ太郎丸二郎丸をかき抱きそ小船ふのりて。四男五郎ふ掉さして。彼処ゞ送りをへ。爲朝も且〳〵彼嶋ふ船ゐよせ

さゝやゞ長女ゞこゝ綿を推量ゞ彼を慰ん爲ふ折ー〳〵も岩が根ふ生ゐる卯木をゐ折ゞ地上ふ挿。されバゆくさきひとふまりて。泊ふと會日あくばこの卯木更ふ活べしと誓ひまひしゞ。その残果ゞて活ふろうさゝふよろこく此嶋ゞ今ゐて卯木或ハ小嶋ふもゐ呼ひ。又この時長女もいづ君ゐ〳〵びまよかしと祝せ〳〵ゞ來嶋名づくるかや。浩処ふ漫のかさより。朱儀の蓋ふ赤ゐ幣を建て。ゐ丈僅ゞ一尺四五寸もあるとかふびる翁をの上ふ乗りく。浪乃ゆく〳〵流ゞよるあぞ太郎丸二郎丸ハ。ゐ爲朝の翁を倩とみふはて汝ハ是水の怪敏地の怪敏ぞく退出よと叱りの。ハ。ゐ爲朝ハ。ゐ翁大ふ怕ゞて。儀の上ふ拝伏ー。僕ハ魑魅魍魎両の属ふあらぬ。ゐのれ世ふいふ痘鬼是ゞり。近曽京攝の間ふあるく。ゐのれ〳〵痘瘡を流行しゐるゞ浪速の浦ふ送り遣られて。大洋ゞ漂流ー。ゐの嶋ハむうとう。痘瘡

ばかりそと笑ひ且く足を休んとおりひつくりぼんくらかごをも君が武徳灼然うれが。
はつ妙く陸ふ上るみかなごと。兎こせの〳〵向後ろ黨ふも令ちふじて。もくふ
立もよふじと賠れで。爲朝女顔色なおくげさてあふめこの嶋ふいつぐ子
どもらもあり。加稱往古よりと痘瘡をちふね嶋人の。俄頃ふこれを病とそは非
命の死をなとのまかれぐし。汝ホゆるそびこの嶋へ再とおうれさふ送
子そ帰させんとて。聽て船ふ引のぼり。遂ふ大嶋へおて帰了。彼処より又伊豆
の國府へ送うるひーそ。このゆく〳〵八丈ふい今のて痘瘡ほしとのく。是併爲朝
が武威掲焉ふあなれど。これさてお爲朝ふいつはでかくてあるぞとて。
長女四男五郎ふ別を告嗚呼〳〵悲ふ耒のくがふひくえくもちうぐふ。長女が
志ぴしとり袖を。ひくと放つ鬼夜叉ふ名ふ鬼ふあるふ称ともひ。捨て四男五郎ふ長女が
ふ私を嶋へと漕ー。爲朝の大船へ。澳のかた〳〵と漕つれぬ。この村見分神津神名

の嶋人ふ爲朝鬼が嶋へ渡了ふひ色ふより。久〳〵信あふられが黒潮ふや流さ迚
ふひくん。又鬼どもふや食れふひくえとそいと惜こめりしふ爲朝を怠なく。
彼嶋へ推渡う。鬼童ふおて帰了ふと待えくび日驚て且欽び。悪人磔右
ふ出迎いよ〳〵厚く待ーくう。その時爲朝ふ見分嶋より郷導せー。二人の子
どもに物数さてして。舊の嶋ふ残ーそめ。彼此の嶋ふふ。五七日つ逗留ありて
遂ふ大嶋へ帰了ふ。大嶋ふてふ春。爲朝ふく〳〵遊覧せんとそ假初
ふ私生ふおひてより暮月へくやふふれど。その人なりふもまねび籠江が物
そひへ更ふいつぐうもめ〳〵ぞあまてにおぼつかなけ迚び利嶋。新嶋ほで人を遣て
ふさそれふおるのは爲九朝稚嶋君も。ゆりのこ後兄ありふ人。ふ兄分日毎ふ
より集ひて。父君へいづ比ふおりふんぐふなりふべとふ。翌へ音耗あるぞ
ふとと。風ふ母の胸ふくーけへ裏ふ

女児ハかゝほでそひほそれどさ郎大夫忠重ハ爲朝の在さぬを却好の幸とさろ
中舊病發りて我意ゐはゝして舉動爲朝今ハなりのゝしり又誰をさ憚るゐふ
せんとそいひ罵るどすれど宛人なくて頭ゐ撻ひどゝ只爲朝の徒ゐ慕ふく彼
君なりしとのこゝ私語めりし忠重ゝゝ一已ゐて成敗ゐ
主れんこそ彼人ゐもふふくて物ゐそれ。茂光とのふなこふして國府よりの
仰といふんゐ。ゐ伏せられのゐびと尋思ー。遂ゐ伊豆の國府ゐふりて
先非ゐ勸解。年の貢を舊ゐ倍ゝして獻るべたよりゐヤふぞ。茂光も年來
の讐胸忽地よりゝけて忠重が罪ゐ赦ー。已後の貢懈ことゐりまてー
仰されゐ忠重許んぞ大嶋よりゝ催促ーて茂光ゐ責し
けりかゝりけるほ今茲四月下旬嶋人俄頃よ奔走ー。曹司ハ去年より女
嫉鬼が嶋ゐもりせゝが一人の鬼童ゐなりてなりふと風声を簫江をや
これそ父ゐもちゝせ進ふせよとて。人ゐ忠重が家ゐ走ふし。二人の稚子ゐ供ひた
郎黨嶋人ゐ扱ゝもに。磯方ちかゝゝ立出ゝ。あれの是かと漕ゐ折ゐ舟
間ぞいふ。長かりて二郎太夫忠重ハ爲朝怎くかゝり来ふとゐゝ。ゆかく
驚ゝくゝ。彼人この嶋を生ーようゐ。既ゐ一年よりまり。一ようびも信ろし
ゐ。今俄頃ゐ帰ると耳ろと風声をゐ。ありゐよ嶋人ゐが
なゝといひて。それ驚ゝとなりとて。騒ぐたれ手ゐもなく。従容とて
居ろりけれ。浩然ゐその瞻昏ゐ。爲朝の船ゐ岸ー剰いとおぞ。ゐしたる鬼
童ゐ倶ーてゆりるひよれゐ。忠重案ゐ相違ーつ。病と稱ーて生も迎ゐ爲朝
既ゐ和ろり上りるゝ。嶋人ゐとれを路の傍ゐ迎てゐづその悪なたを祝ー。さて
忠重がろそいふもにゝなり。衆人ゐ慕ゝれ一五一十。これ彼乃





ろ。おもも〳〵訴ゆえーかゞ爲朝そ女護鬼が嶋人ホ〻教諭さん爲ホ。そし
の外ホ月日な過ーたれよーホいひきほ
て。野嶋の舘へ入りの〳〵ゞ稚子ーらのゝ
ようれ公けくしなこれ彼とゆえまわ〳〵すれゞ爲朝も又長女がうの。太郎丸
二郎丸のゝを説きほし。鬼夜又ホ呼出そ。これゐん長女が父ゐて東の七郎三郎
といひーのわりた此度名を更さして。鬼夜又と呼ぶもとそ。彼親子がこゝ病
ざ爲の信ゐなゐれゐゐと告のふゐ簡江ハ妬ーとおりホ氣ゐもの〳〵。又鬼夜又ゞ
異ゐる形容をも怪ーほぜ。つゞ糸のゝの
ゐし人の歎も痛ー〳〵。太郎丸二郎丸の
噂ゐゆるふぞ。鬼夜又も簡江が怜悧よ嘆賞ー。この夜ハ君臣父子夫婦
酒のりをびと〳〵放ホ舒ろに。爲朝ハ〳〵倶ーたり。二人の郎黨ふら出物



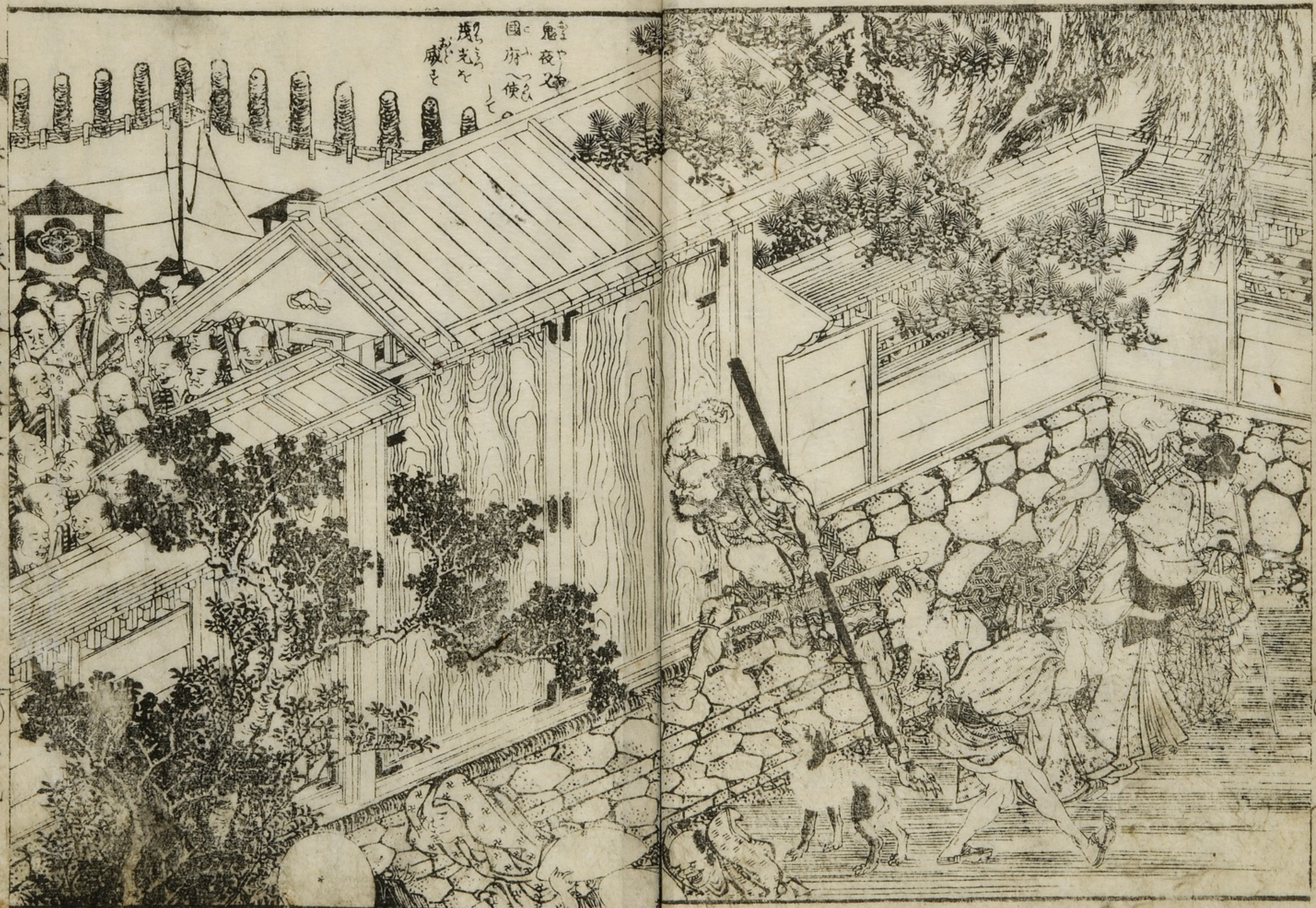
駿とゝしのふかゝて次の日爲朝ハ嶋人おゞ訴なゞゐまふとゞめおぞゞ二郎
太夫ホ呼ーのふゐ。左右わく白くおゝゞゞ
ゐれり。その時爲朝ハ。襖のそゞホ結牛ーて方ホ居なほり。忠重をちゞしみら
ほゝく宜ひくれハゐれ嶋〳〵渡りしまハ。子ゞもらゞゐふせんとふもめゝゞ又
別に爲ホせゞそうれを汝ゞぶなれを幸ほし
茂光よ伐眉いにしなれいゝなんとゐれ
司の仰とも。そゝゞ僕嶋の長として罪めれりのゝいそ故ーホ〳〵ゞてそれを寛
るとゆえめゞの讒言なり又國府へ交加りとせーハ曹司去年乃
奉假初よ船出ありしより。絶て一度も信ゞゞ生死も定うなゝごれふ此
稚子らホ養育月のごて。幼稚とゝ〳〵ゞも朝敵の餘數り。僕一已のホ学ホ
りて。茂光を拒とゝかなゞどゝれふようそ。彼人を寛とゝら〳〵稚子らの音

を継ぐくゆし悼る氣色なく回荅しくべ烏朝勃然としてちよ怒りゆえれ忠重。
縦一年二箇月ぞが信なくとまもせよ。あくその盟を忘れ生死も限定めざし
て抱くるものが隨よせしへ不忠ありさえを汲う非を掩ん烏ふのをお端ふは
う。子共ホが首を残ーとしへ幼稚とどや彼ホへ武士の児ありやうと臨て逃
とかくへ死さえれおもうぞ。死さべくと命ホ助ん人として陶容ことと仇ふ語りで活るを
そのとき汝ーふのふ病よ托て出迎さりしこと一物めるやはそれどぼりて一命を預おくみう。
彫江が父ありぐぞへ立地ふ首ホ刎さえぐられどぼりて一命を預おくみう。
かくてもの色数よ手てへとものとびへ許ーのにそれくと宣へ豫て不知やうみ
なりけし郎黨四五人物蔭より走り出て。忠重が左右のる首ホもうと捉く
動せざど。左ゆかれ鋏をりて下の指ふ曲くみ鋏う。直ホその家よ追入
る。彫江が廊よりつくぐと目送りてかくめれべとうふつ。諫ーはめぬ父の
非ハかりて打とん答ハなうねど。ぐ分ホ切ふれとひみて。人ありうこと泣ホ
いぐへぼ鬼の子の養虫の。袖いぐどかり濡ーけん浮世の人の名のこ。親ふ
さえて似ぐりうこ。時よ鬼夜又主ホ諫ていりうれへ今忠重ホ懲さんとて
彼が指を切ふしるふ。却うて邪念ホ生ーるこ。去ぐ彫江が廊よりつくぐと目送りてかくめれべとうふつ。諫ーはめぬ父の
察それこ。彼ハ曹司ホ恨ること既よ深くれバかるいぐど茂光ホ私をよそど。
今日よりこの中もいうこそれてうれが忠重が所持の朽りの弓矢
なんぐどこる打折て捨にしるふかれバ忠重茂光ホ私をよせんとおりふとる。
る皆自在るうべれかそれもかなうぐど。又ハ曹司ホ狙撃人と計較こる打物
なくいる矛ホ發ーぶど。禍そ籬牆の下ゆりよくーとひめべしうぐと
私語まうせべ烏朝点ぴこ。それもかくこそおりくこそ俄頃ホ鬼夜又が
キスまうこ。その准備をいうさに。又忠重が弓矢打物を没収ーるひぬと且

より先忠重へ忽地指なれ人となりて。左右の掌を紅き枝ある珊瑚ゝ異ならず苦痛甚忍びく逃かくり。ぬうく恨罵りられへ八郎朝敵ゝ
この嶋ゟ流されこれを見れ他ゟうく憐ぶれこそ。嶋こゝ外も押領されこる
高恩を兼うがふ。威勢ゟ無して非道の行ひをとゝも。けれうくへ艱ふて
水田のごとく。彼いうぞうとり世ゟ立ぶんとの怨やひもくせでやへといふまゝ
て。潜ふ痩の愈ゝ外ほらて。折くその隙を窺ふといくども。用心堅固みてく
それよ打物弓矢を持せで。私の出入さへ絶よされば。いふそもせんとぞなり。只
徒ふ思ひ外焦し。ほこりの竜てぞ居りけれ。鳥朝ハ茂光が心ざまを武士ゟ似げ
なり。忠重を賺して。潜ふ貢を納さるゝ。いとねたくおぼえれぞ。這奴外一ト
おどろかし驚かさばやとて。それとなくふ鬼夜叉外もう自異ゟうふ打紛し。
ゟて伊豆の国府へ遣しぬへ。彼処の人とれをこゝろえよ。身丈ハ七尺ゟ餘りて。
面ゝ夜叉のごとく。額の瘤さへ角と塞ゝ。にゝ悪鬼の白昼ふ。横行とゝれゝと怪しほれ良賤老弱も恠れまどひて騒動とかくく
鬼夜叉ハ御曹司の使者と披露しつゝ茂光が宿所へ到りて呼門へ茂光
主従もどゝ怪しみさるべき世の風声ゟ違りど。鳥朝ハ鬼が嶋へ往来
しぬ。鬼童外将ゝ帰ぬり。彼定めて神変不測の癖者なれ〳〵。勲
み生めひゝ。不覚外ゝと罵りぬ。門戸外鎖しぬて裡へ入ざれば。
鬼夜叉ハ潜ふ大嶋へ立かへりく。かくく物がゝれふ。鳥朝もちゝゝて。笑坪へ入ゝおりぬほゝ。これぞ茂光が
讒奏のその一條とハかりふけれ。

## 第二十回

忠重潜ふ伊豆の国府へ走る
義康書ゝ大嶋の蟄居へ遣る


鬼夜叉
國府へ使
殘光を
威を

春去春来ること。嘉應二年のこと。爲朝の嫡男爲九ゆ九歳ふるうるへ。
ななら黄道吉日ゆえふこと今茲正月元二日ゆえ服さして。嶋冠者爲頼と
名告しゆふこの慶賀ゆ三日三夜の吉席ゆ列き。鬼夜又以下の郎黨
そにらゝ祝り。洲民ふるほで漏さこで酒肉を賜ゆれゐ衆皆飽まで飲食
ちく。千秋万歳と祝ーけれど。爲朝左右なくを聽納となまるとにれど彼が孝心も黙止ーがさ
まり。この三四年そ蟄居そくかゝれた席ゆも列もざれをいと本意なく
やおぼーけん。第三日めふ至り。忠重ゆ往ま罪をもるし
ゐそーかゞるめ叙ふ忠重ゞ罪ゆ宥ゐんぞねがしとて頻ゆやーの
ーまへ。爲朝ゆ愁の眉根をゆ許ーのへゞらふあり
父ゆりそもいうでゞ志を改ゞーんこる是君の御恩恵んと謝ーやしそ

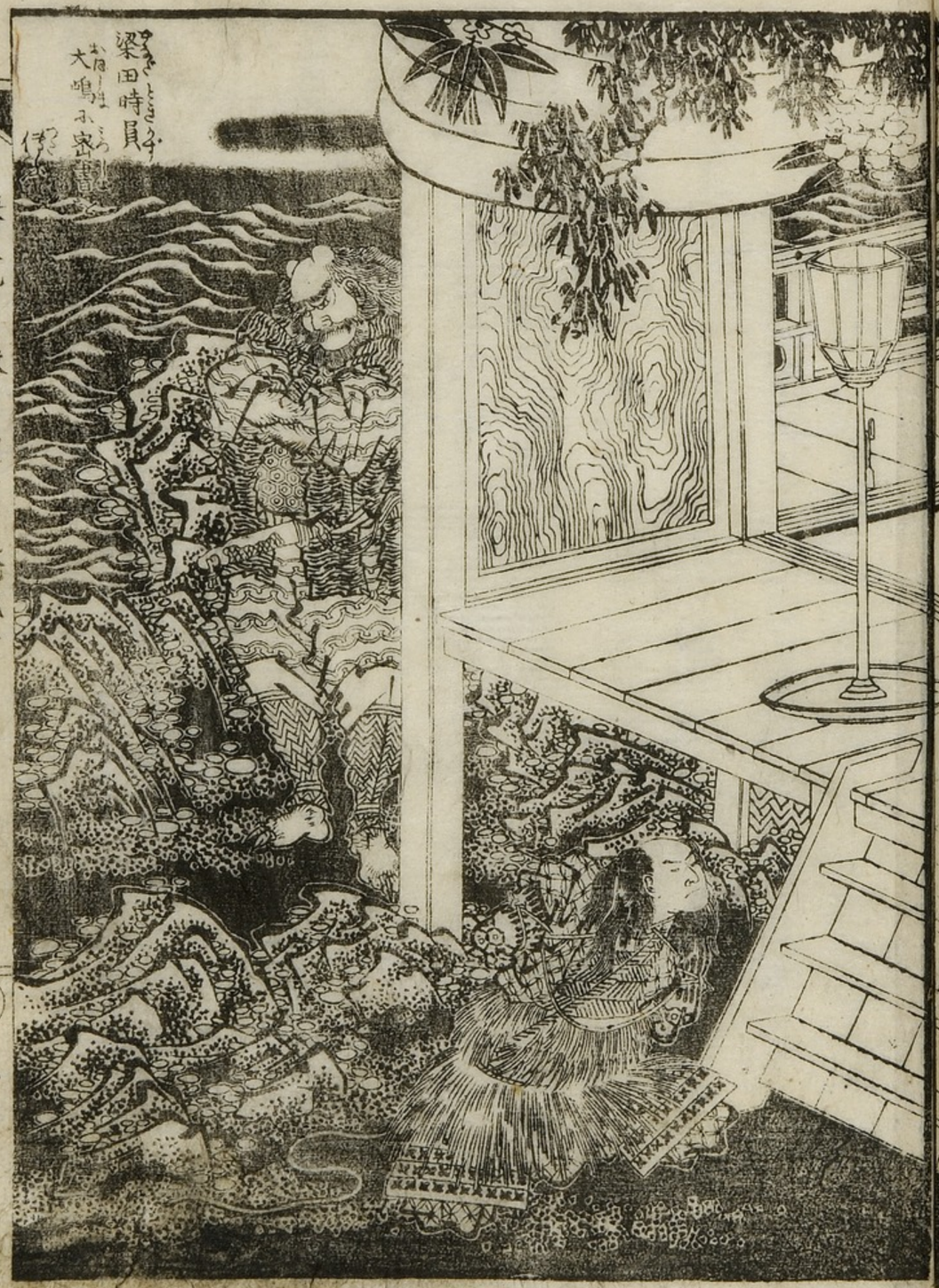
ちふ父ゞ出仕をほつ強ふ。おゞありて鬼夜又かくうるつ。爲朝のほとり近う
ふれを。爲江へ移るびるきまきあそいうふるゞ父へ。ひげざれ渉使ゆ
賜ゐて。はこそ詮びひけめ。などて身とゞ病もにそふりのへざる。去年
ふ今年へよれそ浪の。六十の坂も越るへ。老の病着ふ起居も自在ゐふ
さんろいと公のとゐと問ふ。鬼夜又かいと苦したおりらふ。僕忠重
の宿所ゆ到足しふ。家の内ゆへ人ひとうもなふしてその分野ゆまりに不審
けれゆうなれ嶋人と問ゆたれ一艘失ふう。是彼ゆひめそれふ。忠重ゆのが郎黨ゆおて。伊豆の國府へ
走りたゞんとゐう。ちれゆしきるゆふこそゆひて。直ゐ走ろうんとゐ
ふぞ。爲江へゆふ違ひて忽地ゐ顔ふくろえつ
さしうゐそて居ゐれ。爲朝こそれを笑そ。ちびし沈吟し冷咲して宜ひ

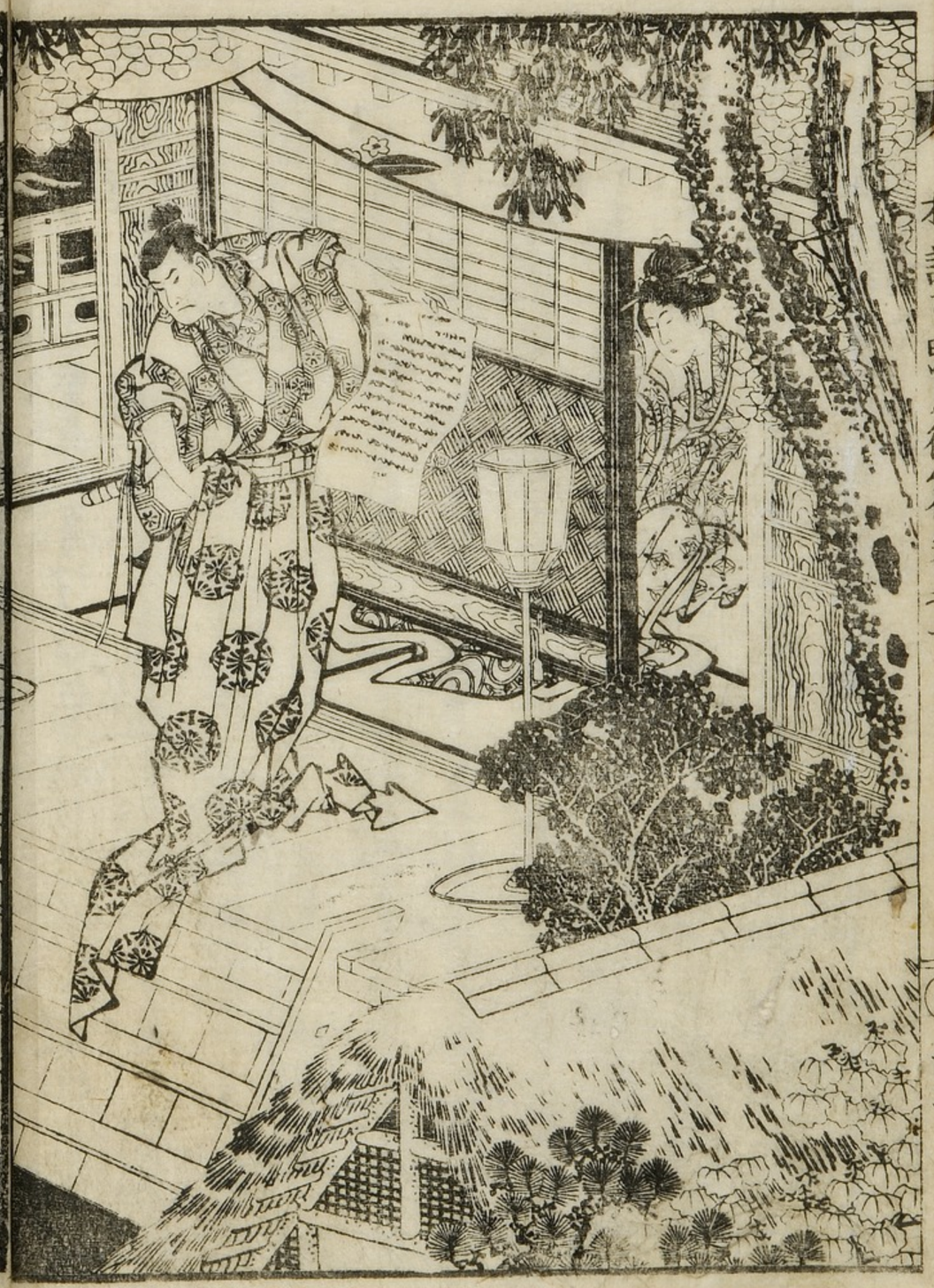
けれバ。一昨より慶賀の醵ゐ。遠見の士卒が憚りなれ隙ゐ窺ひ忠重匹夫家隷をおくり國府へ走り。茂光便宜を計りて寄手をあつめ。其ハ何程のものゝあらん。只うち捻りねぢ殺せと茂光が軍配おそろしに足ていたれバ。請ぜ東國の武士彼よりハ。勅命なりと。宦軍なり。防禦忽ち勢なり。死辱ゐ曝んハ朽をしかれど。今ようともかくもして。稚君らのうりゆうを計らく。用意めされよとけれバ。爲朝うち点頭て。彼らいろ〳〵と疑も理うれど。恩愛ゐ惑爾一女こゝろに挙止て本来れ面目ゐ失んハ平が志ゐ辱ゐなるべし抑爲朝保元ゐ策用られざるいくばくぞ。むしろ生殺りて沖津島守となをを惜からぬ身のかゝてあり。いざ新院を竊出進らせぬるびに御旗ゐ華洛ゐさそめて。彼君の御代とせし。父が孤忠ゐ全とうらめしゝ。新院崩御ハましくなれバ今ハ宿願ゐ果をゝはしき。ちゝめん茂光私よ寄手ゐつゝバ。許べうぶべきまゐ唖して鑿ゐせんゐ。ゐの備みろゞべし。倘宦軍の向ふをゝくバ。潔く腹うち切く。屍ゐこの嶋ゐ曝し。忠ゐ黄泉ゐ竭をべし。忠重鳴呼の白物なりといくとも。爺江が年ゐの誠忠ハれゝくれて。今父ともゐ國府ゐ走らんとするとも。速ゐ身の暇をゝくれ。更ゐ恨ゐーと宣へバ。爺江涙さしぐみて。こハいかにゝゐ一夜の情ゐ。妾が百年の命を惜ゐとゝそゝみて。君解ゞよとゞもなれバ只面めうり刃にふして君が情よ荅なめと。いひもはてゝ。既ゐ咬を刺んとすれバ二人の稚子ゝそのまゐ縋て。よゝと泣くゞめるゐ。爺江も堪かねて一声高く泣

もつめバ鬼夜又ゆでてその刀ゆ奪ひとるゝ
殿おも此ゟ外の誠忠へよくもわれりとゆえ
されを自殺お及ぐ。却殿ゆ恨うに似ー
ぐ。さてハ死めうお苑ゑにとて。輾轉てぞ泣おくれ
を走めぐりて。馬の死場。物のさし引。結路の役宜お至るまぞよく考。すゝといぐ
爲朝御父子の此供ーて。そうちもう。芦が嶋ゟでも落ーはおうゝとをゞと
ゆ念ーつ。人おもきふせぞひそおうふ。大紋一狹を准侯ーてそうゞのこと
れかとおゝぞえ。にるかゝて。春も徒おくれて。四月の上旬おなりよれ
と。茂光忠重ホが音つれも那。遠つ灘。海鰭の吼れうと嶋も。世ハ暖お
なれまーて。日和うらゝぐそ浪風う自静ゟれハ。嶋人が徒然がちゟれ
も不便なれへーて。情由ゆ伝えめけ。魚鈎船とバ許ーてうり。櫻魚を



そう後ゟとられど。堅魚の寄はぢも
磯お細引にして。その曝昏おなり見へ
磯めぐりしう。怪ーた男お捕もうり。その爲体鈎紐お兼く。簑ゆ立て刃
お纏へど。肌お身甲被されなりて。そのかるふび茂光が間諜者なりと精
ーて天庭ゟ縛さくうりてかくりいさく責問お何るものもいぐど。只ゟ曹司ふ
見えもうばる。明白なおべーとゆいくり計らひやぇぐくやとむそ
めて告れが爲朝それ引出せと仰さ。つと後廳お入り。やがて衣服ゆ更
さ。端ちかく出るへ。鬼夜又そ。こづうちふ引居うり。その時爲朝ハ燈燭殿点ちーそ。癖者をえるみふ身丈ゟ六
尺よちかく。眼ハ雙の鈴ゆうけたるんやうみて。口方お。髯青を腰お腰簑
ゆ被さ。漁夫かとえれハ肌お身甲ゆ被うり。げお平人ゟふびえーか


梁田時員
大嶋ヶ密書



鳥朝臣ひそかに人をつかはして。汝を茂光が間諜者歟。などてかく阿容ことと生捕られたると問ふに。彼人怖ぢ氣色もなく。某ハ茂光が間諜者ゐやうそ又間諜者よあふぎ見もあふぎ密かゝえるのあり。傷かれんと退るひし程とやせんかゞ。鳥朝いよ〳〵不審みるに。鬼夜叉以下の郎黨ハ退かゞさて彼がふところをゆめ〳〵ふ。彼男膝をそゝめ声ハ低く。某を下野なる足利義康の郎黨ふ梁田二郎時貞と呼ぶものなり。主君義康の命なり稟一大事ハ告ヤにんと鳥ふ乞ひ。かゝる書簡。秘そ某が襟の内ふめり。こゝかふ披そゝえのとヤふみそ鳥朝ハそゐひらけゝそばりふて。ゐをそふ時貞が襟を綻〳〵ふ。果して一封れ書簡ありけゝ封皮押断そゝえのバその書の略ふ云義康苟も清和の流ゝを汲みて。共ふハ幡殿の孫ゝ八幡太郎義家の三男義國その子義康ふ到れるまふ八幡殿の孫と称そ。又鳥朝ハ義家の嫡子義親の四男鳥義の八男ゐれハ義家の鳥ゐを曾孫ゐと義家を鳥義をゝ子として。家ふ嗣一のひ一ふ鳥朝も又義家の孫ゐ〳〵義康とゐふ親一ゝ人なり。常言ふ孤高らゝそゝとゐハ兎これを悲しむといふ如ハ禍の族よおよぶをおそれなり。保元平治の擾乱ふ嫡家の歴〳〵過半命ふ隕そ。豈痛ざんや。ゐゝれふ今幸ゐて足下独在世ゐゝり。況聞ユ立藤狩野ふ茂光。近曾上洛して讒奏と其ゐ次ゐふ彼ゐ凶て云。鳥朝流人ふして。威風ふ逞し。茂光が所領の嶋〳〵ふ掠ゝつゝ年の貢をとゞめ。剰鬼が嶋一往ゐし。鬼童ふ奴僕とゝ〳〵。伊豆の國府へゐゝし。〳〵國地の老弱ふ驚して歎樂ゝそ。上天子を忘れゞ。下列民を憐ゐで。成敗を放ゆゝて。嶋長忠重ふ罪し。その刑をそゝらそその髪をも脱暴悪絶〳〵比のぐさふりのゐ。伏願ハそ。鳥朝征伐の宣旨ふゐ平されゝ茂光ふ殿の官軍を属ゐろ。日ゐゝび彼嶋ふ押渡そ。鳥朝ふ誅罰一民の土炭を救ひべ〳〵と今えゞめべ。主上驚ゐまし〳〵て。茂光が

告げ諾ふせらるゝ。伊豆の國人北條以下の武士を仰ぐ。茂光ともみ軍兵を發さゝるのふとぞ。かゝれば官軍。ちうたおその嶋へ發向せん欤。足下百發百中の強弓。万夫不當の勇士たりとも。大厦の將よ傾んとするをよく一木の柱ぞ扶あふぐべき欤。弦を弛ゆるべき弓折ぬ。勢竭く。父子東海の水鬼となりてん。ゐゝ義康年の齢四十よ餘れども。いまだ一子を擧ず。倘つぶ不幸あらん憐ぐ子息一人をもうけば義康養ひ子ともそべくも是一つあれ足下の武勇を兼継て足利の家を興さし。又一つあれ足下の子孫斷絶よ及ざらしめん。因く腹心の郎黨梁田二郎時貞が遣して。心中の機密を告ぐらう惑く辱くも膝を嚙ともそのうひあうくん。卒爾の際具ふまゐせざと諸察諸嘉應二年四月日。大嶋八郎殿。源義康とぞ書く巻おさめ梁田時貞が縛をとゝく宣ひけるは。保元平治の兵乱以来世の中且く事なきよ似れども。人のこゝろ猶測がたし。その甲が云く。餉を送れ折るれば義康の使者ともちがひぬるく疑く。かくもとめんせうれいうろ過るり。今示さるゝごとく茂光が讒言みよるく。官軍を向ふるゝこゝろ豫てもひ設ふれ。所なれへ今にふに驚ふ足ふれ。その期ふ及ず稚子ども。刺殺しそ。後ふもし肚ろを切く名おこの嶋ふ留めんそ生く。おをそふる勝れり。もうあれ。義康一家の好を忘れざるぞ。そも〳〵元正がくをいうまゐせん。その望よ任をれよ。ゐゝ扇朝配軍としく恩愛ふ惑溺しその子ふ國地ほろぼして人ふ養ひたれを。世の人もよくきりてぞあれづき。二男朝稚ハ年僅ふ七ゝれども。稟性思慮ありて兄おも劣らざ。それをとゝく明白ふおりざ。

秘藏の一口あり。汝これを義康ぉ進ぜよ。證據とせよ。今生ぉて好意を報ずべくも。死後守護神となりて足利の家門繁昌ぁらしむべし。後世又怖ぢぉそれ返簡ぉ及ぶべと。人ぉ異ぉ遣されし間ぉそくといえども。時負唯ぇとして別を告。潛ぇ後門より走出る。舊の釣船ぉ乘り。その夜の中に。十八里を潛走りて。下田の浦ぉ岩岸し。朝雅の音づれを今ぅぐと俟たりける。



所詮欲するところ孤忠天ぉ任ぇ。これ明日箇樣ぇぐぉろらひて。朝雅を棄べくもあれど汝下田の浦曲ぉ俟ぐこれを拾ぇ。ぉろれとたへ。これも子といと惜ぐ。人ぉ未練るにあらじ。義康も又朝敵の子ぉ養ふぉわぐと。天ぅ授るぉ受。これそむるぅち義康の子ぅり。ぅ不幸はしぐ。朝雅かの浦ぉ至るをぉぢぇ。これ天命ぇとおりひぐえ。直ぇ下地ぉ立ぅぐ。縁由を主君ぉ告よかぇと私語ぅぐへ時負密ぉうけあぅりて。蚊ぅく嘆賞し君ぇ滅ぇ盖世の義士ぅり。縦十七八里の海上ぉ隔るとも。氏御神正八幡乃擁護ぉよろぐ。朝雅恙ぅく彼処ぇ著せまふべし。某雅君ぉ捨ひとりなばら。千里蜂りて暗姉とせん。酉戌の方ぉ當て煙發べ。雅君ぇことぉもぉ。下野ぉ赴たまふとぉもぇ。鳥朝とぅ後よびぉ打笑ぅ。差副の解刀とろぐ。時負ぉ遍ぅ。これ瑞返と名ぼりける。

# 地理書